

聖書：ヤコブ 5：1～6

説教題：聞きなさい、金持ちたち

日時：2017年11月26日（朝拝）

今日の説教題は1節から「聞きなさい、金持ちたち」とつけさせていただきました。皆さんはこれを見て、どのようにお感じになったのでしょうか。ある人は「これは私のことだ。今日は何を言われるのだろう。少し怖いな～」と思ったのでしょうか。またある人は「金持ちたち？それなら私には当てはまらない。今日の説教は私には関係ないものになるのだろうか」と思ったのでしょうか。具体的にヤコブがここで述べている「金持ちたち」とは誰のことなのでしょう。これを巡っては学者たちの間でも議論があります。ある人たちは、信者宛ての手紙の中で「あなたがた、云々」と語られているから、これは当然信者たちの中の特に経済的に豊かな人たちのことだと見ます。前回の4章13～17節では明らかに、商売を計画することができるほどの富んでいるクリスチャンたちに語りかけられていました。しかし他のある人たちは、この金持ちたちとはノンクリスチャンの金持ちたちのことだと見ます。その大きな理由は、ここで彼らの救いの可能性については一切触れられていないということです。悔い改めの勧告もありません。言われているのはさばきの宣告だけです。そしてこれは特に旧約の預言書に見られる諸国へのさばきの宣告にならうものであるということです。たとえばイザヤ書13章にはバビロンに対する宣告の中にこういう言葉があります。「泣きわめけ。主の日は近い。全能者から破壊が来る。」(6節) これはバビロンに救いを与えるための警告の言葉ではなく、バビロンのさばきを予告する言葉です。そしてそれはイスラエルへの慰めのメッセージとなっています。このような伝統に今日のヤコブ書の言葉も立っているということです。こちらの解釈を取る学者たちの方が圧倒的に多いようです。しかしだからと言って今日の箇所はクリスチャンには関係ない箇所ということにはなりません。お金や富についてどう考えるべきか、私たちは改めてここから教えられることができます。そしてこの箇所もちろんここを読む信者たちのためにと書かれた部分です。

まずヤコブは「聞きなさい、金持ちたち」と呼びかけ、あなたがたの上に迫って来る悲慘を思って泣き叫びなさい！と言います。初めて読むならビックリするようなメッセージです。金持ちは幸いな人たちではないのか。特にユダヤ人の間ではそう思われていました。富んでいる人は神から祝福されている人だから、そういう状態にあるのだと思われていました。ところがその彼らについてヤコブは、悲慘が来るから泣き叫べ！とい

うのです。これは一体どういうことでしょうか。2 節に「あなたがたの富は腐っており、あなたがたの着物は虫に食われており」、さらに 3 節に「あなたがたの金銀にはさびが来て」と記されています。これは言い換えれば地上の富はいつまでもは続かないということです。それは一時的なものでしかない。イエス様も山上の説教で、「自分の宝を地上にたくわえるのはやめなさい。そこでは虫とさびで、きず物になり、また盗人が穴をあけて盗みます。」と言われました。ですからこのような富に信頼していると大変なことになります。やがてその価値はなくなります。それはあなたを守ってくれるものにはならない。そればかりか 3 節では「そのさびが、あなたがたを責める証言となる」と言われています。ここにヤコブが金持ちたちを責める一つのポイントが示されています。それは彼らは必要以上に物をため込んでいるということです。自分たちが使う適切なレベル以上に多く財宝をたくわえているので、その貯めこんだものが腐り、虫に食われ、さびが来ている。このことは一方ではこれらの富のはかなさを示しますが、一方では彼らが富を過剰に自分のために集めた、つまり神のみこころに従って正しく用いなかったことを示す明白なしるしです。富は神からこの世にある間、一時的にお預かりしているものであって、この委託された物を私たちは真の所有者のお心に従って正しく管理し、用いる責任があります。それが聖書の主張です。なのにそれを自分のところに過剰にたくわえて腐らせたということは、彼らの心がどこにあったかを現すしるしとなるものです。イエス様は「あなたがたの宝のあるところに、あなたがたの心もあるのです」と言われました。それは富をむさぼり求めた彼らの生き方の見えるしるしで、このこと自体が彼らを責める証言となります。また自分のところにたくわえて神のみこころに沿って兄弟たちを助けるために用いなかったことにおいても、その人を責める証言となる。それゆえ、やがての日には必ずさばかれるというメッセージをヤコブは「あなたがたの肉を火のように食い尽します」という表現で示しています。

この金持ちたちの姿勢の愚かさが 3 節最後でこう言われています。「あなたがたは、終わりの日に財宝をたくわえました。」 「終わりの日」とはいつでしょうか。終わりの日とは、約束のメシヤが地上に遣わされ、みわざを成し遂げ、十字架と復活を経て、天にあげられた以降の時代のことです。使徒の働き 2 章に記されているペンテコステの日に、ペテロは「終わりの日に聖霊を注ぐ」という預言が成就し、ここにその時代が始まったと語っています。このような終わりの日、終わりの時代に、金持ちたちは一生懸命に自分のために財宝をたくわえている。これは全く不適切で愚かなことであるとヤコブは言っています。2 つの意味が考えられます。一つはこの終わりの日は先ほど述べた

ように、イエス・キリストにおける神の恵みのみわざがはっきり現わされた時代です。ですからこの時代に生きている人はキリストにおいて示された神の恵みの素晴らしさを見て、いよいよ神に感謝し、神のみこころに沿って自分自身をささげることが期待されています。そういう時に金持ちたちは自分のために一生懸命たくわえ、ため込んでいます。それは全く不適切なあり方であるということです。もう一つは終わりの日とは、まさに歴史の終わりの時代、歴史の最終局面にある時代であって、もう間もなく今の富が使えなくなる時代です。いつ主の再臨が起こって新しい秩序が現れるか分かりません。従って本来は残された時間の中でこの世の富をいよいよ積極的に用いるべき時です。そんな時に自分のために一生懸命貯めこんで、しかも腐らせているとは、一体何と愚かなことであろうか！ということです。もちろん与えられたものの中から自分の生活と適切な楽しみのために必要な分を用いて良いのです。また将来のための適切な備えも必要だと思います。しかし一人一人自分自身を判断しなければなりません。やがての日にムダにため込んだものが、富に対する私の態度について私を責める証言とならないだろうか。果たして私の富に対する態度は、この「終わりの日」という、より一層恵みが示された時代に生きている者にとってふさわしいものになっているだろうか。

ヤコブの金持ちたちに対する二つ目の批判は4節にあります。それは畑の刈り入れをした労働者への未払い賃金に関することです。ヤコブがこの手紙を書いた1世紀は、ごく少数の裕福な地主の手にどんどん他の土地も渡って行くような状況があったようです。貧しくなった人々は次々に土地を手放し、やがて生活のために雇ってもらわなければならない状況にありました。マタイの福音書20章に記されている「ぶどう園のたとえ」には、雇ってもらうために朝早くから市場に立っている人々が出て来ます。彼らの生活はまさにその日暮らしでした。自分と家族の生活のために、働いた日に、その日の報酬を受け取らなければ生活が困難になる。なのに金持ちたちは色々な理由をつけて、それを後回しにしていたのでしょ。刈り入れた小麦が高く売れるかどうかを見てそれから払うとか、あなたがたの働きはまだ十分ではないなどと理屈をつけて。金持ちたちにこのような傾向があったことは旧約聖書の言葉からも分かります。たとえばレビ記19章13節：「あなたの隣人をしいたげてはならない。かすめてはならない。日雇人の賃金を朝まで、あなたのもとにとどめていてはならない。」申命記24章14～15節：「貧しく困窮している雇い人は、あなたの同胞でも、あなたの地で、あなたの町囲みのうちにいる在留異国人でも、しいたげてはならない。彼は貧しく、それに期待をかけているから、彼の賃金は、その日のうちに、日没前に、支払わなければならない。」

これに対してヤコブは「見よ。その未払い賃金が、叫び声をあげています！」と言います。創世記にはカインに殺された弟アベルの血が、その土地から叫んでいるという表現がありますが、それと同じように本来は声を出すはずがない未払い賃金が金持ちたちの不正を訴えて叫び声をあげている。そしてそのうめきにも似た叫び声は万軍の主の耳に届いていると語られます。金持ちたちの不正がそのまま通り通ることはない。すべての状況をつぶさに見ておられ、貧しい者たちの叫びを聞いてくださる主は「万軍の主」です。多くの天の軍勢を従える主ご自身が、その圧倒的な力をもって金持ちたちにやがて向かって来るのです。そして正義を実行されるのです。

最後3つ目にヤコブが述べている金持ちたちへの批判は、彼らが地上でぜいたくに暮らし、快樂にふけり、自分の心を太らせているということです。これで思い起こされるのはルカの福音書16章に出て来る「金持ちと貧乏人ラザロ」のたとえです。あの金持ちは、目の前に貧しい人がいるのに、彼を心にかけて、自分の楽しみばかりを追求しました。いつも紫の布や細布を着て、ぜいたくに遊び暮らしていました。しかしその死後に何が起こったのでしょうか。何と金持ちはハデスに落ち、貧乏人ラザロが天国でアブラハムの懷に抱かれているということが起こった！地上からは想像もつかない大逆転です。一体何が問題だったのでしょうか。それは金持ちが「自分の心を太らせた」ということです。すなわちその関心の中心にあったのは自分の満足、自分の快樂、ただそれだけ。神を無視し、人を無視して、ただ自分を楽しませることに一番の重きを置いて歩んだ。ヤコブはそういう人について大いなる皮肉を語っています。すなわち彼らは「殺される日にあたって、自分の心を太らせました」と。ここにあるのは家畜が屠殺される時のイメージです。家畜は殺される日に向けて太らされます。一杯えさを与えられ、むさぼるように食べ、こんなに沢山私は食べることができて嬉しい！と悲鳴を上げ、まるまる太って幸せの絶頂にある時に殺される。自分の心を太らせるためにだけ生きている人を待っているのは、このような最後だとヤコブは言うのです。

そしてこのような生活をするための手段が6節にあります。「あなたがたは、正しい人を罪に定めて、殺しました。」これは特に裁判の悪用のことを言っているものと思われま。2章6節：「あなたがたをしいたげるのは富んだ人たちではありませんか。また、あなたがたを裁判所に引いて行くのも彼らではありませんか。」金持ちたちは自分たちの権力を使って、裁判を思う通りに進めることをしていたようです。そうして弱

い人たちから奪い取り、彼らを困窮状態に追いやり、まさに殺すようなことをしていた。6節最後に「彼はあなたがたに抵抗しません」と記されます。抵抗したくても抵抗できない。なすすべのない哀れな人々。しかし神はこのまま見過ごしにされることはありません。貧しい人々をこのような状態に追いやった報いは必ず金持ちたちの上に臨む。ですから1節でヤコブは「あなたがたの上に迫って来る悲惨を思って泣き叫びなさい」と言ったのです。

私たちはどうでしょうか。このヤコブの言葉に聞く時、改めて私たちの富に対する態度、お金に対する態度はどうだろうかと探られます。間違っこれらに多くの信頼を寄せてはいないだろうか。ここに幸いがあると思ってこれを求め、これによりかかる生活をしていないだろうか。しかし今日改めて覚えさせられることは、この世の富は一時的なもので、間もなく使いものにならなくなるものだということです。腐り始め、虫に食われ、さびが来るもの、いやすでに来ているようなもの。それはいつまでも私の生活を守ってくれるものではない。今しばらくは幸せをもたらしてくれそうでも、それが終わりになる時が来ようとしています。そしてその日には神から委託された富を私たちがどう管理し、用いたか、神に問われることになります。そのことを思って私たちは富に心奪われるのではなく、神に心を向けて、正しい富との接し方、またこの用い方を考え、取り組んで行かなければなりません。

この手紙の受取人の多くは貧しい状態にあったと思われます。彼らは迫害によって散らされて生活が困難な状態にありました。そんな彼らにありがちだった誘惑は、金持ちたちに羨望のまなざしを向け、彼らとの関係を大切にして、このサバイバルゲームを乗り切って行こうとすることでした。富と地位を得て、この世の人々のように豊かな生活をするのでした。そんな彼らにヤコブは金持ちたちが行き着くあわれな将来を思って、彼らの富をうらやむことがないように！と勧めているのです。富に信頼して歩む人には悲惨が迫っている。そのことを良く見て、自分の進むべき道を選び取る必要があります。一方もし比較的富を多く与えられている者は、富の魔力に良く良く注意し、何よりもこれを委託してくださった神に喜ばれるように用いる責任があることを良く自覚して歩まなければなりません。それは具体的には貧しく、助けを必要としている人々に愛のシェアをすることであり、また神の御国の事業のため、神のわざのさらなる進展のために投資することです。そういう人こそ神から委託された富を正しく用いている賢い人だと聖書は語っています。Iテモテ6章17～19節：「この世で富んでいる人たちに命じなさい

い。高ぶらないように。また、たよりにならない富に望みを置かないように。むしろ、私たちにすべての物を豊かに与えて楽しませてくださる神に望みを置くように。また、人の益を計り、良い行ないに富み、惜しまずに施し、喜んで分け与えるように。また、まことのいのちを得るために、未来に備えて良い基礎を自分自身のために築き上げるように。」ここに「惜しまずに施し、喜んで分け与えること」は「未来に備えて良い基礎を自分自身のために築き上げること」だと言われています。間もなく使いものにならなくなる地上の限りある富をそのように使う人は、実は自分の永遠の生活のために良き準備をしている人だということです。このような賢さをもって地上の富を用いるようにと勧められています。

イエス様は「あなたがたは神にも仕え、また富にも仕えることはできません」と言われました。また「金持ちが神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通る方がもっとやさしい」と言われました。私たちはこれを聞いて「そんなことはない。私は大丈夫」と言うことはできません。富に対する愛は、神に対する私の献身を確実に鈍らせると聖書で言われています。このことを覚えて、神にも富にも、と考えるのではなく、神への献身こそを自分の中で明確にしたいと思います。富が私を祝福するのではなく、神こそが私を真に祝福してくださる方です。今の富は腐り始めており、虫に食われ始めており、さびが来始めています。そのようなものに信頼を置くのではなく、神にこそ目を上げ、従う歩みの中で、これらを御心に従って用いる生活へ進みたい。そしてこの富がやがて終わりになった時に神が与えてくださるいつまでも消えることのないまことの富を受け継ぐことを楽しみにして、神に信頼し従う最も幸いな生活へ進みたいと思います。